原著論文

曾侯乙墓竹簡の書法に関する一考察

瀬筒寛之

（二〇一八年十月二十三日　受理）

A Consideration of the Calligraphy of Chinese Characters Used in Zenghou Yi Bamboo Slips

SEZUTSU Hiroyuki

要約

本稿は、戦国早期のものとされる曾侯乙墓竹簡の書法を考察するものである。その文章内容は、葬送に用いられた車馬や武器甲冑記録（遣策）であり、文字は日常通行体の部類と考えられる。曾侯乙墓竹簡の書法には、i楚系文字の特徴である扁平な字形ではなくやや縦長で左に傾斜している、ii楚系文字の円転の特徴が薄い、iii起筆は露鋒で鋭く、横画は弧形に上に膨らみ、終筆は押さえず軽快に引き放つ速書きである、などの特徴が見られる。iiiの特徴は他の楚簡と共通する一方、i、iiの特徴は、他の楚簡とは一線を画すものである。その要因としては、曾侯乙墓竹簡の年代が戦国早期であり、戦国中期を中心とする他の楚簡との時代差によるところが大きいと考えられる。縦長で左傾し、比較的直線的にも見える戦国早期の曾侯乙墓竹簡の書法から、扁平で円転を基調とする戦国中期以降の楚系文字の書法へと変遷していく過程を確認することができる。

キーワード：篆書、戦国時代、楚、竹簡、曾侯乙墓

一　はじめに

一九七八年に湖北随州で発掘された擂鼓墩曾侯乙墓（以後、曾侯乙墓と略称）は、戦国早期の社会の様相を示す重要な発見となった。出土した文物には、曾侯乙編鐘や曾侯乙編磬、曾侯乙大鼎、そして文字を有する竹簡二四〇枚などがある。この大量の竹簡上の文字数は六六九六字に及び、その内容は、葬送に用いられた車馬や武器甲冑の名称を記録した遣策であった。曾侯乙墓の出土状況を詳細に整理したものに『曾侯乙墓』（一九八九年）上・下二冊[1]、また、曾侯乙墓竹簡の文字を分類し、摹写して全体を示したものに『曾侯乙墓竹簡文字編』（一九九七）[2]がある。

曾侯乙墓竹簡の文字の書法に関して何琳儀（一九八九）は、曾国の遺物である同竹簡の文字に典型的な楚系文字の特徴が見られるとして、その要因は、戦国期には既に曾国は滅びて楚国の属国

* 鹿児島大学 法文教育学域 教育学系　講師

となっており、文化的にも深く楚国の影響を受けていたのであろうと示唆している[3]。しかし、曾侯乙墓竹簡の文字は、楚系文字の特徴を有してはいるものの、包山楚簡や郭店楚簡などの文字とはやや異なるように感じられるのである。本稿の目的は、春秋戦国期の書法を概観する中で曾侯乙墓竹簡の文字に特徴的な異彩の淵源を考察し、曾侯乙墓竹簡と他の楚系文字との字体・書法の異同を捉えることである。

二　曾侯乙墓竹簡の書法

（一）曾侯乙墓竹簡の前後―春秋・戦国期の楚系文字―

戦国早期の曾侯乙墓竹簡の文字の書法を確認する上では、その前後、春秋期以降の楚系文字の変遷を捉えておく必要がある。ここでは、何琳儀、馮勝君「東周時代的文字」（一九九六）[4]を参考に、春秋時代から戦国時代における楚系文字の変遷を後掲の図版によって確認する。図一から図六への流れは、春秋早期から戦国中期の楚系文字の流れを示している。

中子化盤銘（図一）は、楚の春秋早期のものとされる金文で朴訥、泰然とした趣を有しており、未だ後の縦長、屈曲、装飾的、繁華などの楚系金文の特徴は見られない段階のものである。その後、春秋中期から戦国早期にかけて、楚文字には顕著な風格の変化が発生した。王子午鼎を初め、王孫遺者鐘（図二）や曾侯乙編鐘（図三）は字体が屈曲している。楚王酓章作曾侯乙鐘（図四）は、楚の恵王から曾侯乙に贈られたものであり、楚国と曾国の密接な関係を示す一例である。この時期、楚文化圏では楚王酓璋戈、呉王光桓戈、越王勾踐剣などに見られる極めて装飾性に富む鳥蟲書が出現し、一世を風靡した。曾侯乙墓竹簡（図五）は筆勢が縦横にはしり、用筆の軽重や緩急など変化に富む。

戦国中期は、戦国早期の字体の縦長を脱し、筆画は円転、字体は縦勢より横勢に向かう過渡期であり、顎君啓節はこの時期の典型の作と見ることができる。包山楚簡（図六）は秀逸灑脱で書法が一貫し、非常に高い芸術の域に到達している。

以上、春秋戦国期の書法史に位置づけると、曾侯乙墓竹簡は楚簡中最早期の戦国早期のものであり、その文字は、春秋後期の文字の特徴と、戦国中期以降の楚系文字の萌芽の両者を内包していると考えられる時期のものである。

（二）曾侯乙墓竹簡の書法

曾侯乙墓竹簡の文字は楚系文字に分類される。典型的な楚系文字の特徴とはいかなるものか。『楚系簡帛文字編』の「序言」[5]を簡潔にまとめると次のようである。

Ⅰ　字形は扁平で、傾斜させる傾向がある。

Ⅱ　筆勢は円転流麗である。

Ⅲ　横画は上反りの孤形に作る場合が多い。起筆・終筆は、一般に落筆（起筆）は重く収筆は軽い「首粗尾細」の感がある。

Ⅳ　その他の特徴としては、簡易草卒なものや、後世の隷書の雛形である波勢挑法を備えているものがある。

Ⅴ　結構は岐異で多くの特殊形体があり、筆画は多変、符号は繁雑特殊である。

つぎに、後掲の図五に掲げた曾侯乙墓竹簡の文字の特徴について、次のようなことが言える。

i　楚系文字の特徴である扁平な字形ではなく、やや縦長で左に傾斜している。

ii　楚系文字の円転の特徴が薄い。

iii　起筆は露鋒で鋭く、横画は弧形に上に膨らみ、終筆は押さえず軽快に引き放つ速書きである。

iv　簡易草卒なものが少なく、波勢挑法（はねあげ）はあまり見られない。

v　結構は、筆画の簡化、繁化や、偏旁位置の不定などの異化の様相が多岐にわたる。

iii、Vの特徴については、楚系文字の特徴と言われるものと一致している。楚系文字における扁平な字形というのは、その後の隷書の字形の萌芽としての一面を内包しているとも考えられ、二十世紀に陸続として発見された戦国中期以降の楚系文字の特徴である。一方、i、ii、ivの特徴はどのような理由が考えられるのか。何琳儀は、戦国楚国の銅器銘文の文字の特徴が前後期に分けられるとして、前期は背が高く整って華麗流暢に書写され、後期は扁平、傾斜して草卒に書写されていると述べている[6]。曾侯乙墓竹簡の文字は肉筆の簡牘文字であり日常通行体と考えられるが、春秋中晩期から戦国前期の銅器銘文の「背が高く整って華麗流暢」な書風に、少なからず影響を受けていたものと思われ、これがi、ii、ivの特徴の淵源と言えよう。

また、曾侯乙墓竹簡の文字は、春秋晩期の晋国の盟約文書とされる侯馬盟書（図七）や温県盟書（図八）の肉筆文字の特徴と共通性が見られることが指摘されている。後掲の表一－一、一－二「文字比較表」は、侯馬盟書や戦国中期の楚系文字との書風の異同を見ようとしたものである。侯馬盟書と近い書風を呈している文字としては、表一－一の無、表一－二の国、紫、書などが挙げられる。南北に地理的隔たりがありながらも、当時の通行書体としての書法の共通性が、侯馬盟書や曾侯乙墓竹簡の文字に見られる。

二十世紀後半に楚地から出土した戦国時代の簡冊類は三十種以上、文字数は十万字前後に上り、その多くは書籍と文書である。これらの楚簡について、先行研究により明らかにされた時代、時期、出土地、簡数、内容について記しておくこととする[7]。書籍に属するものは、（5）慈利楚簡、（7）郭店楚簡、（12）清華大学蔵戦国竹簡、（13）上海博物館蔵戦国楚簡などであり、当時の流伝や後世の影響を追う上で貴重な史料とされる。その他は卜筮祭禱の記録、遣策、文書類である。

《戦国早期》

（1）曾侯乙墓竹簡　戦国早期（前四三三～前四〇〇）湖北省随県　二四〇枚　遣策

《戦国中期》

（2）望山楚簡　戦国中期　湖北省江陵県　①二〇七枚　②六十六枚　卜筮記録　遣策

（3）天星観楚簡　戦国中期　湖北省江陵県　七〇枚　卜筮記録　遣策

（4）包山楚簡　戦国時代（前三一六）　湖北省荊門市　二七八枚　司法文書　卜筮祭禱　遣策

（5）慈利楚簡　戦国中期前半　湖南省慈利県　一〇〇〇枚　書籍

（6）九店楚簡　戦国中晩期　湖北省荊州市　①一四六枚　②八八枚　①農作物関係、日書　②季子女訓

（7）郭店楚簡　戦国中期（前四世紀末）　湖北省荊門市　八四〇枚　書籍

（8）信陽楚簡　戦国中期　河南省信陽市　①一一九枚　②二九枚　①書籍　②遣策

（9）新蔡葛陵楚簡　戦国中期（前三四〇前後）　河南省駐馬店市　一五七一枚　卜筮祭禱　遣策

（10）仰天湖楚簡　戦国中期後半　湖南省長沙市　四三枚　遣策

（11）夕陽坡楚簡　戦国中晩期　湖南省常徳市　二枚　楚王に関する記載

（12）清華大学戦国竹簡　戦国中晩期　出土地不明　二三八八枚　書籍（全貌不明）

《戦国晩期》

（13）上海博物館楚簡　戦国晩期　不明　一七〇〇余枚　先秦の古籍

（14）香港中文大学簡牘　戦国・漢・晋　出土地不明　戦国簡一〇枚（全二五九枚）　楚簡は文献類

三　曾侯乙墓竹簡の文字の諸相

ここでは、二（二）のvに挙げた曾侯乙墓竹簡の文字に見られる繁化の様相、簡化の様相に触れ、さらに他の楚簡に比較して簡化の見られない字例、異化の様相、嚢形を有する字形などの具体例を挙げ、曾侯乙墓竹簡の特徴の一端を掲出する。

（一）繁化の様相

後掲の表二に、字体上余分な点や線を加筆する字例を挙げた。文字結構には無関係で、単純に装飾的な性格を有すると考えられる場合は、飾筆と呼ばれることもある。以下、表二の文字を見ていく。

上字は、西周金文では長短の二横画で「二」のように書かれていたものが、一画が加えられて「上」「上」のように三画となったものである。表二の曾侯乙墓50簡「上」ではさらに左に点が加筆されている。上字に関して、『曾侯乙墓竹簡文字編』の「諸言」[8]に次のような文章がある。

（略）「上」字條下収「上」〔簡50〕據字形宜隷作「少」字、然據辭例似與同簡「下軒」對対言、故仍入「上」字條下。

つまりは『曾侯乙墓竹簡文字編』「正文」では「上」字を上字に配列している。一方同編巻末の「摹本及釈文」においては、少字と釈されており、おそらくは「摹本及釈文」の方が誤記であろうと考えられる。上字の説文の字形は、縦画の下に横画が接する二画からなる字形「丄」であるが、それよりも以前の楚における日常通用文字は、隷書の骨格を有している。包山楚簡10簡の上字は、最終横画の下に点が加筆されており、曾侯乙墓50簡とともにも飾筆と言ってよい。

下字も、右脇に短横画を有する隷書の骨格であり、信1・25簡の下字は、初画横画の上に一横画が加筆されている。純粋な飾筆

と考えられる。

入字は、上部縦画の中央付近に横画が加筆されている。人字「 」との区別の意図を持つ増画ではないかとも考えられる。

玉字は、１２３簡のように一斜画を加えるものと、１３７簡のように二斜画を加えるものとがある。王字と玉字の区別は、金文においては王字の肥筆や装飾的線條により明確に区別されてきたが、この時期は王字の装飾性が薄くなるとともに、一方の玉字に加点することによって、両者の区別をするようになったことが窺える。

焚字は、下部の火に横画が加筆されている。天星観簡ほかの楚簡においても同様で、この時期の楚系文字に共通に見られる。

楚字は、下部の足の「□」部分が「日」となっている。例示の天星観簡は加筆されていないが、他の楚文字には加筆の例が見られる。

襄（襘）字について、１３３簡は衣編の湾曲部右脇に加筆が見られる。広く空く空間を埋めようとする美的感覚の発現とも考えられる。

以上、繁化の様相を見てきたが、上、下、焚、楚、襄（襘）字は飾筆と考えられる。一方、入、玉字は、近似した他の文字との書き分けの意図が読み取れるため、単なる飾筆とは異なるものである。

（二）簡化の様相　―「參」―

前項の繁化とは逆の簡化の様相を示す例も見られる。楚系文字の簡化の様相は様々である。表一－二の曾侯乙墓竹簡の為字「 」や、表一－一の望山楚簡の馬字「 」のように、身体の下半部分を省略し、二横画を加えて省略符号としての役割を果たしている例がある。また、言、善字など、中央の縦画を省略して速書きに供する例がよく知られている。

ここでは參字（表三）を取り上げてみたい。曾侯乙墓竹簡の參字は、下部を省略している。説文篆文の下部と縦画を省略した形である。他の楚簡の參字も参照すると、戦国期における參字の略化程度には、竹簡によってかなりの幅があることが分かるが、いずれも參字として認識していたということであろう。試みとして、參字の簡化の程度が低い文字から高い文字へ順に並べると次のようになるが、簡化の流れと竹簡の書写時期とは一致していない。

楚帛書　　郭店楚簡　　曾侯乙墓竹簡　　包山楚簡

　↓　 　↓　 　↓　

（戦国中・晩期）　（戦国中期）　（戦国早期）　（戦国中期）

文字の簡化は、早く効率的に整えて書くことができ、かつ文意を過不足なく伝達・受領できるという、当時の字形共通認識の範囲内において行われていたものであろう。

（三）他の楚簡に比して簡化の見られない字例　―「無」「馬」―

金文の無字は「」のように書かれる。包山楚簡や郭店楚簡の無字（表四）は、中央部の「人」形の省略が見られるが、楚系文

字における無字の平均的字体であろう。一方、曾侯乙墓竹簡の無字は、中央の「人」形を省略しておらず、大きな簡化は見られないことが分かる。

馬字（表四）についても同様であり、曾侯乙墓竹簡の馬字は簡化が進んでおらず、同時代の石鼓文の字形にも近い。やはり包山楚簡や清華大竹簡の文字（表四）を、楚系文字の平均的字体と考えることができ、曾侯乙墓竹簡の馬字は比較的謹厳な字体と言える。

（四）異化の様相

異化は、楚系文字に見られる偏旁の改変で、偏旁位置の不定や、近似の意味を持つ偏旁の加筆や変換、また声符の変換など、その様相は複雑多岐にわたるとされる。表五に異化の様相を示す字例を挙げた。

① 偏旁位置の不定　―「紫」「桐」―

表五の曾侯乙墓竹簡の紫字は、「糸」、「此」が左右に併置されているのに対し、説文の字形は上下に配置されている。また、曾侯乙墓竹簡の桐字は、「木」、「同」が上下に配置されているのに対し、説文の字形は左右に配置されている。これらは、甲骨文や金文以来の、偏旁位置の交換可能な段階の文字の特徴を残存している例と言える。

② 偏旁の通用　―「豸」と「鼠」―

曾侯乙墓竹簡の貘字は、「豸」部分を「鼠」と書写している。「豸」を含む他の六文字も全て「鼠」と書写しており、楚系文字における通用と考えられる。

③ 偏旁の部分の改変　―「樂」「右」「左」

曾侯乙墓竹簡の樂字は、下部の「木」を「大」と書写している。また、右字は口に従わず、左字と同様に工に従っている。他の精華簡や郭店楚簡の文字は口に従っており、曾侯乙墓竹簡の右字は特異である。

（五）嚢形を有する字形

前述の繁化、簡化、異化以外の、曾侯乙墓竹簡や他の楚文字における特徴的な字例として、次の①、②を挙げる。

① 「箙」「韔」

表六に曾侯乙墓竹簡の文字のうち嚢形を有する字例を挙げた。箙字について『楚文字編』に「箙の初文。外は嚢の形」と説明している。韔字の望山楚簡の字例も、同様の嚢形を有する字形で珍しい。

② 「因」「淵」「瀍」

表七に、籠字形の囲みを有する字例をあげた。因字については、郭店楚簡にも同様の籠字形の囲みが見られる。また郭店楚簡の淵字も、やや形状が異なるものの、縦画に凹凸のある形状をしている。瀍字については、西周金文中にあって非常に個性的な籠字形の囲み形を有している史頌簋の文字を、他の楚文字の字例との比較対象として掲出した。これら嚢形や籠字形の囲みを有する文字は、円転の特徴を有する楚文字にあっても、さらに独特の風趣を持っている。

以上三では、曾侯乙墓竹簡の文字の諸相を見てきた。これらは

文字を使用してきた当該時代の人々の意識の反映に他ならない。文字の変遷の過程をたどることは、文字を使用した人々の意識―字体の識別性の保持、簡略に速く書く、美しく書く等―の変容を読み取ることであり、大変興味深いものである。

四　おわりに

本稿では、春秋戦国期の楚文化圏の書法を概観する中で、曾侯乙墓竹簡の文字に特徴的な異彩の淵源を考察し、他の楚系筆写文字との字体や書法の異同を捉えた。書法の変遷には、時代の気風や筆記用具の発展、筆者個別の技量など複数の要因が関係していると考えられる。また公的銘石体と日常通行体の書法の相違も見られる。曾侯乙墓竹簡の文章内容は、葬送に用いられた車馬や武器甲冑記録（遣策）であり、戦国中期の望山楚簡や天星観楚簡、包山楚簡、信陽楚簡、新蔡葛陵楚簡、仰天湖楚簡等と同様の日常通行体の部類と言えよう。曾侯乙墓竹簡の書法は、ⅰ楚文字の特徴である扁平な字形ではなくやや縦長で左に傾斜している、ⅱ楚系文字の円転の特徴が薄い、ⅲ起筆は露鋒で鋭く、横画は弧形に上に膨らみ、終筆は押さえず軽快に引き放つ速書きである、ⅳ簡易草卒なものが少なく、波勢挑法（はねあげ）はあまり見られない。ⅴ結構は、筆画の簡化、繁化や、偏旁位置の不定など、異化の様相が多岐にわたる、などの特徴が見られた。ⅲ、ⅴの特徴については他の楚簡の文字と一致している。一方、ⅰ、ⅱ、ⅳの特徴は、他の楚簡とはやや異なるものであった。それは、曾侯乙墓竹簡の年代が戦国早期であり、戦国中期を中心とする他の楚簡よりも早いという時代差が大きな要因であると考察した。また、春秋中晩期から戦国早期の銅器銘文の書風が、曾侯乙墓竹簡に見られる日常通行体にも少なからず影響を与えたものとした。縦長で左傾し、比較的直線的にも見える戦国初期の曾侯乙墓竹簡の書法から、扁平で円転を基調とする戦国中期以降の楚系文字の書法へと変遷していくのである。

図表

図一　中子化盤銘[9]　春秋早期　楚

図二　王孫遺者鐘[10]　春秋晩期　楚

図三　曾侯乙編鐘[11]　戦国早期　曾

図四　楚王酓章作曾侯乙鐘[12]　戦国早期　曾

図五　曾侯乙墓竹簡[13]　戦国早期　曾

図六　包山楚簡[14]　戦国中期　楚

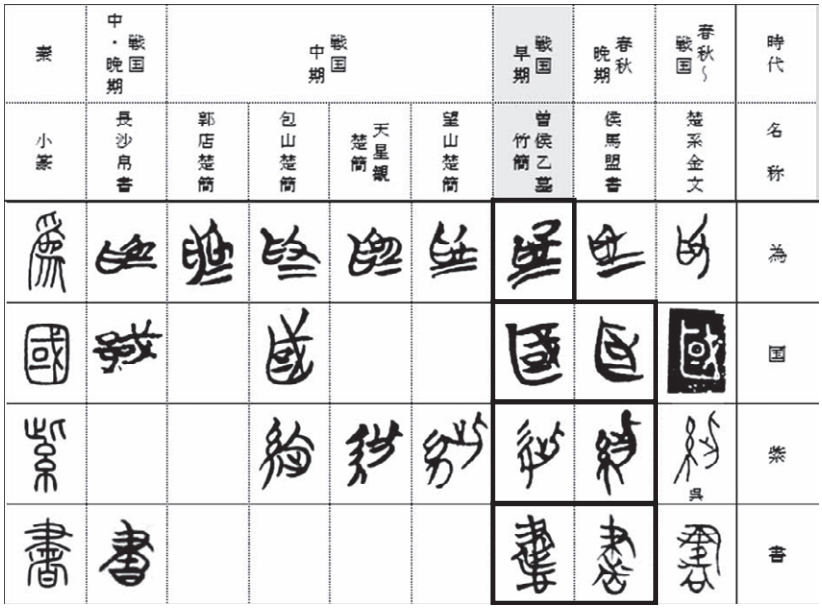
図七　侯馬盟書[15]　春秋晩期　晋

図八　温県盟書[16]　春秋晩期（前四七九年）　晋

表一－一　文字比較表（一）[17]

時代	名称	之	王	玉	無	馬
春秋～戰国	楚系金文					
春秋晚期	侯馬盟書					
戰国早期	曾侯乙墓竹簡					
戰国中期	望山楚簡					
	天星觀楚簡					
	包山楚簡					
	郭店楚簡					
戰国中・晚期	長沙帛書					
秦	小篆					

表一－二　文字比較表（二）



時代	名称	為	国	紫	書
春秋～戰国	楚系金文				
春秋晚期	侯馬盟書				
戰国早期	曾侯乙墓竹簡				
戰国中期	望山楚簡				
	天星觀楚簡				
	包山楚簡				
	郭店楚簡				
戰国中・晚期	長沙帛書				
秦	小篆				

表二　繁化の字例

楷書	説文	曾侯乙墓	他の楚簡
上	丄	50	包 10
下	丅	20	信 1・25
入	入	1	(侯馬)
玉	王	123　137	望 M2 50
樊		212	天卜
楚	楚	122	天卜
襄　禳		133　176	

表三　簡化の字例

楷書	説文	曾侯乙墓	他の楚簡
曇　參　晶　厶	曇	129	帛・甲 2・71　郭・語 三 67　包 12

表四　簡化が見られない字例

楷書	説文	曾侯乙墓	他の楚簡
無	無	43	包 23　郭・老 丙 12
馬	馬	98	包 162　清・良臣 06

表五　異化の字例

楷書	説文	曾侯乙墓	他の楚簡
紫		6	信2・5
桐		212	
貘		2	包271
樂		176	郭・老丙4
右		1	郭・老丙8　清・皇門5
左		31	清・良臣08

表六　囊形を有する字例

楷書	説文	曾侯乙墓	他の楚簡
韔			望・M28
箙			
韔			

表七　籠字形の囲みを有する字例

楷書	説文	曾侯乙墓	他の楚簡等	
因		53　76	郭・語一31	
淵	古文　篆文		郭・性62	
瀍			郭・緇27	史頌簋

（表凡例）

※字例下の数字は、竹簡の整理後に付された番号。

※「他の楚簡」欄の簡称について

包……荊門包山二号墓竹簡

信1……信陽長台関一号墓竹書簡

信2……信陽長台関一号墓遣策簡

候馬……候馬盟書

望M2……江陵望山二号墓竹簡

天卜……江陵天星観一号卜筮簡

帛・甲……長沙子彈庫帛書・甲篇
郭・語……荊門郭店一号墓竹簡・語叢
郭・老丙…荊門郭店一号墓竹簡・老子丙
郭・性……荊門郭店一号墓竹簡・性自命出
郭・緇……荊門郭店一号墓竹簡・緇衣
清・良臣…清華大学蔵戦国竹簡・良臣
清・皇門…清華大学蔵戦国竹簡・皇門

註

1 湖北省博物館編『曽侯乙墓』上・下　一九八九年　文物出版社
2 張光裕、黄錫全、勝壬生主編『曽侯乙墓竹簡文字編』藝文印書館　一九九七年
3 何琳儀『戦国文字通論』中華書局　一九八九年　一四八頁
4 何琳儀、馮勝君「東周時代的文字」（劉正成主編『中国書法全集　第4巻　商周編　春秋戦國石簡牘帛書巻』榮寶齋出版社　一九九七年　三一頁）
5 勝壬生『楚系簡帛文字編』「序言」　湖北教育出版社　一九九五年
6 同註3　一三九頁
7 横田恭三『中国古代簡牘のすべて』二玄社　二〇一二年　を参考にした。
8 張光裕、黄錫全、勝壬生主編『曽侯乙墓竹簡文字編』藝文印書館中華民国八十六年　二頁
9 劉正成主編『中国書法全集3　商周　春秋戦國金文』榮寶齋出版社　一九九七年　三十九頁
10 同註9　四四頁
11 劉彬徽、劉長武『楚系金文彙編』湖北教育出版社　二〇〇九年　二二〇頁
12 同註11　一九八頁
13 劉正成主編『中国書法全集5　秦漢篇　秦漢簡牘帛書巻一』榮寶齋出版社　一九九七年　三五頁
14 西林昭一責任編集『簡牘名蹟選3　湖北篇（一）』二玄社　二〇〇九年　五〇頁
15 劉正成主編『中国書法全集4　商周編　春秋戦國石簡牘帛書巻』榮寶齋出版　一九九七年　一四四頁
16 同註15　一五一頁
17 表一－一～表七に使用した図版は主に、李守奎『楚文字編』（華東師範大學出版社　二〇〇三年）、および前掲註8、註11の書籍から抜粋・転載した。